

## 《教育長メッセージ 第26号》

### 『母親』

私の母は、2月28日が誕生日で85歳になりました。

もうすぐ5年になる震災後、3カ月近く避難所で過ごし、南三陸町のとりの津山町横山の仮設住宅で、ひとりで暮していました。何度か神奈川でいっしょに暮らすように話をしました



が、不便でも親戚が多い田舎での暮らしがよいと宮城県を離れませんでした。しかしながら、兄を不慮の事故で亡くしたことをきっかけに、マスコミからの取材に苦慮していた母を車に乗せて、神奈川に連れてきました。

私は、震災前から田舎でひとり暮らしをしている母のことは気になっていましたが、身の回りのことは自分でできるし、近所の人たちと楽しく暮らしている様子もあり、自分で生活できなくなるまではと、お正月とお盆に帰省して数日ともに過ごすことを繰り返していました。

母は、まさか80歳を過ぎて、神奈川県で暮すとは思ってもみなかったようで、「おら、まさか、かながわですおどは、思わねがった。」と繰り返します。私も、この年になって母といっしょに暮らせるとは思いませんでした。どちらかという、定年になったら田舎に帰って暮らそうかなと思っていたぐらいです。

私は、42年ぶりに母といっしょに暮らすようになり、3年が経ちます。震災や兄の事故は悲しいことですが、結果として、いっしょに暮らせていることはうれしいことです。楽しいことです。

家に帰ると、母と方言（宮城県のズーズー弁）で会話します。私の母語なので、心が落ち着くのです。ホッとするので。

時々、母が味噌汁を作ります。子どもの頃に体に染みついた味が甦ります。カレイの煮つけ、カキのお吸い物、お雑煮、母の味は、最高です。なぜか食べると、心が平らになり、安心するので。

休みの日、時間が取れば、母を車に乗せてドライブに行きます。天気がよければ、二人で散歩をします。まさか、この年になってこんな時間が過ごせるなんて思いませんでした。幸せな気分になります。

度重なる災難をふり返って、母は、「ししゃねな。」（しょうがないなあ。）とつぶやきます。私は、黙って聞いています。人生の重さの何もかもをその言葉で終わりにして、胸の中におさめようとする母の姿は、いつもより小さくなります。

私がそうなのです。子どもにとって親は(母は)とても大切な存在です。  
どうでしょうみなさんは、ご両親はお元気でしょうか。  
また、みなさんのお子さんにとって、あなたはどのようなでしょう。

私は、60歳になり、これまでの時間を取り戻すように、母といっしょに暮らせる喜びをかみしめているところです。

次回は、『いきもの』について、子どもの頃の思い出をもとに話をしてみたいと思います。